

百 日 說 法

今 東 光

角 川 書 店

法説日百



昭和三十三年八月十日 初版発行
昭和三十三年九月十日 再版発行

定價 二五〇円

著者 今 東 光

発行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 あ き 子

製本者 鈴 木 俊 一

発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番
電話九段(33)〇一一一(代表)

Printed in Japan 中光印刷・鈴木製本
落丁・乱丁本をお取替えいたします

目次

琴ヶ浜と菊池寛	六
ストライキ	八
良心ということ	一〇
大阪文化	三
青少年犯罪防止法	一四
減税	一六
死刑	一八
笛吹きと踊る人	二〇
銀座	三
燕尾服と頬被り	二四
大阪の食い倒れ	二六

人斬り彦齋	六
雨の河内野	八
歎異鈔	一〇
民主主義とは	三
性教育	一四
坊主と芸者	一六
宗教者	一八
歩行者優先	二〇
法と戒律	三
坊主にくけりや	二四
一所不住	二六

六	三〇	三	二四	二六	一八	二〇	三	二四	二六
---	----	---	----	----	----	----	---	----	----

キューバの反乱

ザルツブルグの人形

ストは非合法

乗降の秩序

郷土文学

かげくち

春
闕

青白きインテリ

天理教

巧言令色

運とは

原則について

比叡山觀光路

作州津山

勤務評定

公明選舉

女について

奚
量
見

市民

エネルギー

マニラの便り

六 アデン

六 非行少年

穴
裸

男女の友情

三 特ダネ

七四 欲の皮

矣不安

人情

승

 Δ

八四

八六

八

九

九二

九四

九六

九六

100

1011

ON

吳

只

ブラシ	二〇	災厄	一四〇
質	二三	クロ	一四三
禅	二四	貯金	一四四
親鸞	二六	手拭人形	一四六
厠	二八	漫才	一四八
テント劇場	三〇	例外者	一五〇
先生	三三	太陽のごとく	一五三
三惚れ	三四	上方根性	一五四
拷問	三六	大阪人	一五八
選挙の結果	三八	売春その後	一六〇
みち	三〇	あだ花	一六二
イギリスの反日感情	三三	ツバメ	一六五
時計その他	三四	八尾市	一六八
意見	三五	ある女	一六九
サガンのこと	三八	潔癖	一七二

古文書から	一七
愛国心	一三
不気味な人間	一五
サックドレス	一七
一つの小説について	一八
日本的なもの	一八
カルカッタ通話	二二
隣人	二四
舶来好き	二六
跋文	二四

再論	一八
処女	一九
喧嘩の美学	二二
釣り人	二四
縁の石	二六
裏日本の海	二八
安宅	三〇
坊主と小説家	三二
屑	三四

一八
一九
二二
二四
二六
二八
三〇
三二
三四

百日說法

琴ヶ浜と菊池寛

三月二十三日の日曜日は珍しい早春の好天氣にめぐまれたが、あいにくのストライキだった。それでも大阪相撲は最終の激戦が展開されるというので超満員だった。僕は東西会の中村広三さんに招かれ、正面砂かぶりで久しぶりに相撲を満喫することができた。あたかも隣におすわりになったのが大阪商工会議所会頭杉道助さんで、大阪府知事に推されて迷惑しているこの時の人も、しばし浮世を忘れた感じらしい。

優勝の行方が混とんとしているなかで、最有力の琴ヶ浜が登場すると、館内は割れんばかりの歓声だ。何千何万という人間が熱狂して叫ぶ声というのは、なにか不気味なもので、アフリカのホッテントット族に襲撃されるような錯覚に陥るような気がした。こんな態度の日本人を横から眺めていると、やっぱり薄気味悪い人種のような気がするのではあるまいか。

僕は朝夕と対戦する琴ヶ浜の真剣そのもののごとき横顔を見つめていると、はしなくも一つの顔を思い出した。それはたれかに似ている。よく眺めると、それは菊池寛の若き日の横顔そっく

りだった。それもそのはずだ。二人は同じ香川県出身だ。同郷という血のつながりにはなにか一脈通ずるものがあるのだろうか。

僕は三十になるやならずのころから菊池寛を知った。そして彼の三十五の年に大げんかをして、終生、交わりを断ってしまった。いまから思えば愚にもつかないことで火花を散らすけんかをしたのだが、彼も若かったし、彼よりも十歳も若かった僕の血の気は、まったく手のつけようもないような火の玉みたいなものだったからだ。菊池寛は純文学を捨てて通俗文学におもむき、ついに文芸春秋社をこんちあらしめる実業家となった。その間に僕は一時、左翼にひっぱり込まれたり、果ては坊主になったりして、ふたたび文筆生活に入るようになった。菊池寛は惜しまれながら死んだ。まだ死ぬには早い年だった。僕は、はからずも河内かわうちの天台院という小さな寺の住職となって関西に移住し、大阪の土地で琴ヶ浜の横顔から菊池寛の面影おもかげをしんでいた。館内何万の観衆とは、まったく無縁の人間となって過去の追想にふけた。なんとという孤独の追憶である。人間は時として、群衆の中で一つの孤独地獄を形成するものらしい。

朝夕と琴ヶ浜とは運命をかけた相撲をとっている。どちらが勝ってほしいとも思わなかったし、どちらも負けさせたくはなかった。そのうちに朝夕が勝った。敗れ去る琴ヶ浜の横顔をしみじみと眺めているうちに、彼は群衆の中にもみくたにされながら消えて行った。僕は若き日の菊池寛のイメージが消えるのを茫然ぼうぜんとして見送るのであった。

ストライキ

春季闘争とやらで、また恒例のごとく私鉄十一社のストライキが早春の話題となった。総評の安恒書記長は卓をたたいて十一社の結束をおう歌したそうだが、こんなけしからんヤツはない。中労委のあっせん案をけとばしてストライキするなら、なんのために調停委員を存在せしめるのかわからんではないか。仲裁は『時の氏神』といって、夫婦げんかでも仲裁者の言には聴従するならいだ。こんな権威のない中労委なんかやめてしまえばいい。そうでないなら中労委にもっと強大な権力を与えるべきだ。中労委が、この線という一線を打ち出したら、経営者と労務者との両者は絶対に服従するのでないかぎり、いつまでたっても両者は戦わなければならない。

僕は、ちっぽけな宗教新聞の社長をしているので、つくづくと労務者の生活のことを考える。僕は彼らの生活を考えると、いかに日本が貧しいとはいえ、まったくわびしくなるほどの貧乏な生活をさせていることに気が気ではない。一軒の家庭にテレビ一台、冷蔵庫一つ、自家用車一台という最低生活を送っているアメリカの労務者の生活などに比較すると、わが国では労務者どころか課長級、部長級の生活さえ追いつかないくらいだ。いまでこそ戦後になって八時間制が確立

したが、八時間制を厳守したら日本の産業は止まってしまうだろう。

僕の弟はフランスに二度行ったが、フランス人はことごとく昼寝をする^{と聞いた}。うらやましいようだが、ウサギとカメの話ではないが、昼寝をする民族などは世界の強国の列からしだいに転落しつつあるではないか。

アメリカ人の理想は、一週間に四日働いて二日休養したいのだそう^だ。日本では土曜が半日、日曜全休だから五日半働いている。しかしながら、もし心から敗戦日本の再興を念ずるなら、月火水木金と働かなければならないはずだ。私鉄十一社の年中行事のごときストライキはまったく言語道断^{ごんごどうたん}なのである。

僕は長いあいだ、文筆生活から離れていた。ほとんど三十年近い。しかしながらその間ただ遊んでいたのではない。読みかつ読みつづけていた。大阪近郊の河内野^{かふちの}にイオリを結んで文筆生活をはじめると、毎日講演やら座談会だ。そのあいだにはラジオ、テレビ、学校の講師と追いまくられ、夜おそく帰宅すると、それから書齋にこもって朝まで小説を書かなければならない。六時ごろに床に入ってとろとろと寝入ったかと思うと、電話で起される。三、四時間ぐらいしか寝ていられない。それほど働かされているのだ。僕は働かされていることを感謝し、幸いに健康に恵まれていることを感謝している。もし僕が働きすぎることにハラを立ててストライキしたい^{と思}っても、いったい全体、だれを相手に闘争すればいいのだ。文学者はストライキの相手がないのだ。

良心ということ

いったいわれわれの生活で、良心的などという言葉が軽々しく飛び出すが、なにを規範きはんとしていうのであろうかと思うと不思議な気がするのである。

商都大阪の商人らは自分のあつかう品物について、良心的に製造された品物を、良心的に売るのでと宣伝するが、アメリカでも中国でも、その良心的な品物の不良を発見されてキャンセルをくらった始末だ。こうなるとなにか良心的かわからない。

結婚周旋しゅうせんぎょう業の広告を見たまえ。彼らは良心的に縁談を世話するとうたい文句を掲げるが、決して良縁などには恵まれないのが真相だ。もっと率直そうちよくに言うとなぜしげな世話をするが、怪しくないほうはたよりないことおびただしいのだ。

このごろでこそ良書が出版されるようになったが、いわゆる、良心的出版ほど怪しいものはない。原稿料は支払わない。印税は平気で踏み倒す出版屋が、あえて良心的出版をしていると豪語するのだから恐れ入る。こんな本屋にかぎってエロ本みたいなものを出版して社会に害毒を流すのだ。

いつぞや奈良の博物館で、法隆寺出品の帝釈天たいしゃくてんかなにかの塑像そざうを見たが、こわれた足の木心にちゃんと五本の指がついていたのには驚嘆した。

また奈良の三月堂の塑像の足を修理するに際し、そのくつを脱がせると、これまたいいねいにちゃんと五本の指がついていたそうだ。

奈良朝時代の仏工は千年後の人間の目に触れることを、なんら予想することなくして、これだけの細工を施しているのだ。これこそ良心的と言うのは言い過ぎではあるまい。

またさらに聖林寺の十一面観世音菩薩像の補修の際、その台座からはずして研究していると、足裏から部厚い金泥こんでいが塗ってあることを発見したのである。

僕が古都の奈良に遊んで、日本の古い文化財を見学するたびに、つねに驚きとよろこびとを新たにするのは、これらの中から真実の意味の良心的なるものを見出すからである。僕などジャーナリズムの渦中かちゅうにあって、まずい文章を書いているが、そのたびごとに反省するのは、果たして僕の仕事は良心的であったか否かに存する。良心的だと思惟しゆいするときには、たとい非難の雨が降っても、さまで苦にならない。なぜならそれは一種の受難だからだ。けれども良心的でなかった場合、批評家の苛烈な論難よりも、社会の非難攻撃の世評よりも、まず自分自身を責めている。かくのごとき良心的反省ほど苦しいものはない。

もし日本の政治家にして、一日はおろか半日でも、このような良心的反省をする人が存在したら、日本はもう少し健全に再興しているのではあるまいか。

大阪文化

僕は東京へ出ると腹が立つ。こんども上京して日比谷近くのホテルに泊まったが、騒音で寝られたものじゃない。

このホテルには宿泊料だけで一夜一万三千円、応接間や控えの部屋などで三十坪もある部屋がある。おもに新婚組が一夜の思い出をつくるために使っているらしいが、『春泥^{しゅんでい}泥』の映画製作のときに上京したら、日活でこの部屋に泊めてくれた。泊まってみて驚いたり、あきれたりしたことは、わが天台院は建坪三十坪なので、すっぽりとこの部屋におさまるわけだ。なるほどわが天台院は小さい寺だなと思ったことである。その後は自分で上京して、このホテルに泊まっても、もったいないので、大部屋には入らない。この大部屋に入ってさえ窓下の街路から沸き上がってくる騒音のため、安眠ができなかった。

しかるに大阪では、当局から騒音防止の通達があると、いっせいにびたりとクラクションを鳴らさないのである。この点はいかにも見事な足並みだった。こういうことになると、大阪人は不思議な理解力と結束力を示す。あるいは都会人としての訓練が熟達しているのかもしれない。

江戸時代は湯島に聖堂があって、各地の秀才が集まって勉強した。徳川幕府のご用学問として朱子学を修得させ、林大学頭をもって学頭とした。湯島の聖堂がアカデミーとして発達するにしたがい、それはしだいに武家階級の独占に帰したのは是非もない。

しかるに大阪の町人などは、しからば町人同士が集まって学問をしようではないかと金を出し合い、懷徳堂という学塾を開いた。そこでは朱子学ばかりでなく、陽明学をも研究するというふうで、自由な学風が温存されたのは、一つに彼らが町人階級の出身者だったからである。かつては大塩の乱として知られる反乱を起した中斎大塩平八郎も、天満^{てんま}与力^{よりき}でありながらすすんで講学したということだ。

懷徳堂は大東亜戦争で災禍^{さいか}を蒙って、今日にいたるもいまだ再興されておらないが、懷徳堂を民間人の手によって造ったエスプリは巖然として消滅しておらない。ケチン坊として知られるぜい六は、ムダな金を使うことは大きらいだが、いいことのためには惜し気もなく金を使う一つの例証とすることができる。

大阪では文化は育たないという迷信がある。僕はそうは思わない。育てようとしなからに過ぎない。誰か有名な文化人が音頭取りになったら、必ず東京文化といわれる植民地的文化をのぐものを作るだろうと思っている。大阪文化という地方的特色を発揮したものが作られなければならないと思っている。それが可能となると九州の、四国の、淡路の、あるいは小豆島^{しょうじま}のなどと、より小さい地方にも文化は興るに違いないと思う。

青少年犯罪防止法

聞くところによると政府は、青少年の犯罪防止のため、従来の少年法を改正するそうだ。

僕など、昔をふりかえってみると、まさに青少年犯罪法に触れるヤツだったので、こんな法律がしだいに峻厳しゅんげんになることにたいしては関心なきを得ないのだ。

生まれながらにして悪い少年少女というものはないものだ。素質だという人もあるだろうが、僕はそうは思わない。大部分は環境だ。僕の例をあげると、父が船乗りだったので小学校だけで六つ変わっている。こんな環境におかれてみたまえ、どんな内気で、おとなしい子供だって、すれっからしになるものだ。僕自身は転校がいやだと思っても、家族が引越すのだからいかんともすることができない。転校した学校の教師には、好い人もあれば、いけすかないヤツもあった。教育に熱心な先生もあれば、不熱心でお話にならない先生もあった。謹厳な先生がいると思うと、女教員と怪しい仲のヤツもいた。子供心にも、ちゃんと男女関係などかぎつけるもので、僕などは小学生のころから、頭から教員なんてものを信用していなかった。

まして船乗りのセガレだから、港灣で働いている人を知るし、父の船の下級船員などとは親し